東鑑

四十一
四十二

和書
一〇三六四號

和書門
類 一〇三六四號
函 一二〇
架 一
冊 二六

内閣文庫
和書
類 一〇三六四號
冊 一古
函 一四八
架 八

内閣文庫
番號 和 10364
冊數 26(22)
函號 148 40

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

本清
白由

新刊吾妻鏡巻第四十一

建長三年辛亥

正月小

一日　壬戌天晴風靜也。

役人

御劔　前右馬權頭　御調度　陸奥掃部助

御行騰　佐渡前司

一御馬　相摸式部大夫時弘

二御馬　武藏四郎時仲　同五郎時忠　相摸八郎時隆

三御馬　遠江六郎左衛門尉時連

同　新左衛門尉經光

四御馬　上野彌四郎右衛門尉時光　同十郎朝村

丙一二九八一號

五御馬　和泉次郎左衛門尉行章　出羽三郎行資
今日將軍家并若君御前等有御行始之儀相州御
第入御

供奉人

將軍御方

前右馬權頭政村　武藏守朝直
陸奥掃部助實時　宮内少輔泰氏
北條六郎時定　越後五郎時家
佐渡前司基經　大藏權少輔朝廣
小山出羽前司長村　下野前司泰經
新田三河前司頼氏　前太宰少貳爲佐
遠山前大藏少輔景朝　内藏權頭資親
安藝前司親光　能登右近太夫仲時
大隅前司忠時　内藤肥後前司盛時
筑前々司行泰　薩摩前司祐長
遠江次郎左衛門尉光盛　武藤右衛門尉景頼
大曽禰左衛門尉長泰　和泉次郎左衛門尉行章
攝津新左衛門尉　常陸次郎兵衛尉行雄
本間次郎兵衛尉信忠　小野澤次郎時仲

若君御前御方

尾張前司時章　遠江守時直
相模右近大夫將監時定　相模八郎時隆
郡波左近太夫政茂　上野三郎國氏
縫殿頭師連　越中前司頼業

伊勢前司行經　伊賀前司時家
三浦介盛時　城二郎頼景
伊賀二郎左衛門尉光房
式部六郎左衛門尉朝長
出羽次郎左衛門尉行有　壹岐太郎左衛門尉
大須賀次郎左衛門尉胤氏
肥後次郎左衛門尉景氏
彌善太右衛門尉康義　隱岐新左衛門尉時清
大曽祢五郎

一日　癸亥　槐飯奥州御沙汰
御馬　武藏守朝直　御調度相摸式部大輔時弘
御行騰　下野前司泰經　村櫛三郎兵衛尉

一御馬　陸奥彌四郎時茂　淺羽左衛門尉次郎
二御馬　下野七郎經經　同三郎兵衛尉廣經
三御馬　上野五郎左衛門尉重光　同次郎光時
四御馬　出雲五郎左衛門尉宣時　尾張次郎公時
五御馬　遠江六郎教時

三日　甲子　槐飯左馬頭入道正義沙汰
御馬　宮内少輔泰氏　御調度秋田城介義景
御行騰　新田三河前司頼氏　同次郎顯氏

一御馬　足利三郎家氏　太平左衛門尉
二御馬　上野三郎國氏　同新左衛門尉經光
三御馬　遠江六郎左衛門尉時連　同三郎行資
四御馬　出羽次郎左衛門尉行有　同二郎

五御馬　三村新左衛門尉時親

四日　乙丑天霽　丑刻塔辻燒亡。人屋數十宇災

大藏權少輔朝廣之家在其中累代相傳地券文書

以下重寶書以火燼云云

五日　丙辰天霽　二位殿并二棟御方等御行始

秋田城介義景甘縄第入御

供奉人布衣下括袴悪袋

二位殿御方

備前々司時長　遠江右近大夫將監時兼

相摸三郎太郎時成　那波左近大夫政茂

出羽前司長村　新田三河前司頼氏

上野三郎國氏　縫殿頭師連

遠江六郎左衛門尉時連彌一郎左衛門尉親盛

攝津左衛門尉　常陸二郎兵衛尉行雄

出羽三郎行資

二棟御方

陸奥掃部助實時　北條六郎時定上御

相摸式部大夫時弘　越後五郎時家

内藏權頭資親　安藝前司親光

越中前司頼業　大隅前司忠時

伊賀前司時家　式部六郎左衛門尉朝長

豐後四郎左衛門尉忠經

肥後二郎左衛門尉景氏

和泉二郎左衛門尉行章

大曽祢次郎左衛門尉盛時
和泉五郎左衛門尉政泰
筑前二郎左衛門尉行頼

七日　戊辰天霽　於幕府有女房勝負二位殿二棟御方等御會合相州之室御參云々

八日　己巳天晴　營中心經會也將軍家出御今日相州金銅藥師如來像八寸被令鑄御産平安之御祈請之爲也工藤三郎左衛門尉光泰奉行之則被遂供養鶴岡別當法印爲導師又長日藥師供并信讀大般若經被始行云々

次由比濱御弓始被撰射手陸奥掃部助監臨之武藏守遠江守此條六郎以下爲見物而被行向云々射手十七

一番　武田五郎七郎
二番　横溝七郎五郎
三番　布施三郎
四番　平井八郎
五番　眞板五郎二郎
六番　佐貫彌四郎
七番　多賀谷彌五郎
八番　河野右衛門四郎
九番　棗右近三郎　獨弓
九日　庚午　政所問注所等勝負延年云々
十日　辛未天霽　今日御弓始之義奥州相州前

一番　早河次郎太郎
二番　桑原平内
三番　小野澤二郎
四番　薩摩九郎
五番　池田五郎
六番　諏方兵衛四郎
七番　工藤右近三郎
八番　一色四郎左衛門尉

右馬權頭宮内少輔等出仕云。
射手十人（絡立烏帽子水干葛袴淺履）
武田五郎七郎政平　二十五度射之
早河二郎太郎祐泰
二番　横瀧七郎五郎忠光　桑原平内盛時
三番　多賀谷彌五郎重茂　陬方兵衛四郎盛頼
四番　布施三郎行忠　眞板五郎二郎經朝
五番　棗右近三郎　平井八郎清頼
十一日　壬申天霽　將軍家參鶴岡八幡宮御束
帯御劍笏經代之御車也
行列
先諸大夫八人
星野出羽前司季義　出雲權守爲政
近江前司季實　押立左近大夫資能
少輔木工助廣時　安藝右近大夫親繼
安藝左近藏人重親　和泉左近藏人
次殿上人十人
安野中將隆兼　尾張少輔清基
二條少將兼教　藤少將實遠
前左兵衛佐隆氏　一條少將能清
前治部少輔經章　中御門侍從宗世
前兵衛佐忠時　六條侍從公實
次御車
梶原右衛門三郎景氏　伊賀式部八郎兵衛尉

三村左衛門尉時親　武藤次郎兵衛尉頼泰
大曽祢左衛門太郎長継　善左衛門次郎康有
内藤豊後三郎　小野澤二郎時仲
肥後四郎兵衛尉行定　山城二郎兵衛尉信忠
伊東三郎　平右近太郎
以上直垂帯剣候御車左右
次御剣役人
武藏守朝直
次御調度懸
武藤左衛門尉景頼
次御後供奉人　布衣下者
相模右近大夫將監時定　陸奥掃部助實時
遠江六郎教時　武藏四郎時仲
足利三郎家氏　内藏權頭資親
新田三河前司頼氏　遠山大藏少輔景朝
伊賀前司時家　大隅前司忠時
伊勢前司行經　遠江二郎左衛門尉光盛
大曽祢左衛門尉長泰　遠江六郎左衛門尉時連
梶原右衛門尉景俊　大曽祢次郎左衛門尉盛經
彌善太左衛門尉康茂　攝津左衛門尉
和泉五郎左衛門尉政泰
十五日丙子天晴　將軍家二所御精進始也仍
二所并若君御前　右馬權頭弟入御ゝ物請之間可
有御座云云

十七月　戊寅天晴　於相州御弟而放光佛像被
供養導師鶴岡別當法印文被修如意輪護摩是皆
御産御祈也
廿日　辛巳天晴　將軍家二所御進發也
行列
前陣隨兵十二騎
葛西七郎時重　江戸八郎
野本二郎行時　佐貫七郎廣經
佐野八郎清經　山上彌四郎秀盛
肥前太郎貧光　佐貫次郎太郎泰經
豐嶋平六經泰　山田四郎通重
千葉七郎次郎行胤　東四郎義行

次御引馬三疋
次御弓袋
次御鎧
次御甲持
次御具足
次御調度懸
持壽丸
次御油
次御先達
次御駕
三村新左衛門尉時親
肥後四郎兵衛尉行定
式部八郎兵衛尉
内藤豐後三郎

武藤二郎兵衛尉頼泰　藤倉三郎盛義
梶原右衛門三郎景氏　小野澤二郎時仲
澁谷二郎太郎武重　山城次郎兵衛尉信忠
平右近太郎　土屋新三郎光時
攝津新左衛門尉　儀仗太郎
平井八郎清頼

已上十五人御駕之在左右

御後
尾張少將　中御門少將
武藏守　相模右近大夫將監
陸奥掃部助　相模式部大夫
北條六郎　後五郎

遠江六郎　武藤四郎
相模八郎　司三郎太郎
足利三郎　新田三河前司
内藏權頭　遠山前大藏少輔
大隅前司　内藤肥後前司
伊賀前司　伊勢前司
上野彌四郎右衛門尉　同三郎兵衛尉
大曽禰次郎左衛門尉　遠江二郎左衛門尉
梶原右衛門尉　和泉五郎左衛門尉
出雲五郎右衛門尉　波多野小次郎
信濃四郎左衛門尉　筑前次郎左衛門尉
武藤左衛門尉　和泉次郎左衛門尉

出羽三郎
山内藤内左衛門尉
阿曽沼小次郎
鎌田次郎兵衛尉
後陣隨兵十二騎
阿曽沼四郎次經
清久彌二郎秀盛
國分二郎盛重
小栗彌二郎朝重
眞壁小次郎
長江七郎景朝
出羽四郎左衛門尉
隱岐三郎左衛門尉
紀伊次郎左衛門尉
近江大夫判官
木村六郎秀親
高柳四郎三郎行忠
推名六郎盛繼
善右衛門次郎康有
麻生太郎親轉
足立左衛門三郎元氏

廿一日　壬午　天霽　相州室爲御平產百日泰山府君祭於被始行泰房奉仕之供粉者秋田城介義景沙汰也

廿五日　丙戌　天霽　從二所歸著一昨日昨日兩日雪降甚路次之御煩也

廿八日　己丑　相州御方信讀大般若經等結願云云

廿九日　庚寅　信濃國諏方之社去廿日烏五十計聚甘死之由大祝申云云

二月大

一日　辛卯　天晴　鶴岡絵旨之祭御神樂如例今日京都之使者參著去月廿二日北政所御産云云又

二日　式乾門院崩御同

六日　丙申天霽　申刻雷鳴

十日　庚子天晴　甘縄邊燒亡。從坎地相法橋之宅起。自戌刻。到子之一點不止。東若宮大路南由比濱北中下馬橋西佐々目谷也。相摸右近太夫將監時定相摸入道時隆等弟。以下數箇所災云云。今日相州自染筆被献御書於二條殿。向後御心安可存之由云云

廿日　庚戌　大御厩此間新造。葛西谷口。河俣後山崩顛。人多以被推土石之谷而二人立亡云云

廿四日　甲寅　於前右馬權頭弟當座三百六十首有繼歌。二條中將尾張少將武藏守遠江守佐渡前司鎌田次郎兵衛尉等會合。以三百六十種重寶。欲置物云云

三月大

六日　丙寅　武藏國淺草寺。施牛者忽然出現奔走于寺。于時寺僧五十口計食堂之間集會也。見件之怪異。其内人立所。受病痾。起居進退不成居風云云。七人即座死云云

七日　丁卯　去月十四日。熊野山神倉燒亡。此事兼日相摸在御夢想之間。殊驚噪賜造營等事。有御助成之由云云

九日　己巳天霽　風靜也。今日相州於御第被供養法華經。形木鶴岡別當法印爲導師。是依年來御素願。爲今事切。令修結云云

十日　庚午天晴　將軍家永福寺之花御覽被持
女房輿武藏守相摸右近大夫將監相摸式部大夫
以下爲供奉云
十四日　甲戌　去比信濃國諏方社頭湖大鳩井
唐船等出現庁時之間如消而失云此事無先規之
由社家驚申云
十五日　乙亥天晴　永福寺恒例之法會也前右
馬權頭武藏守等參堂云今日相州造立羅計二皇
令供養賜各可被祈御運賜依事也
四月小
十三日　癸卯天晴　相州驚大明神爲奉幣可遣
御使於武藏國之處三鳩之神事也他社御奉幣事
敢可有其憚之由當社神主申仍被讓子細於若宮
別當法印之間今日進發云
廿日　庚戌　國司領家年貢事殊可致精誠辨濟
若春三月已後就此事本所訴訟出來者可被地頭
於本所申分之由被仰出云
廿二日　壬子雨　若宮別當法印自武藏國鶴宮
歸參御祈願成就奇瑞不一去十九日於社頭御神
樂之砌一之見事記宣尤嚴重殊有其奇特之由云
廿三日　癸丑　甚雨自卯一日未止今夜子剌洪
水村里家耕所苗悉以流失云
廿六日　丙辰　去十九日上野國赤木嶽燒爲先
例兵革兆之由令在廳等申之由云

五月大

一日　庚申天霽　相州室家産所聯絡禪尼被結
御祈禱等行云々

三日　壬戌天陰　若君御前俄不例頗御辛苦諸
人群集營中周章云々

五日　甲子　八道相模三郎平資法名真阿率十三修
理權大夫時房朝臣三男也三番之引付頭人也

八日　丁卯　以河越修理亮重資去貞永元年十
二月廿三日任廳賞可令有武藏國拾撿拔職之旨
被仰出云々

十四日　癸酉天晴　彼御產之事可爲明日酉剋
之由若宮別當法印隆弁依被申參集人々悉退散

十五日　甲戌天晴　風靜也今朝相州以安東五
郎太郎爲御使被送御書於若宮別當法印隆弁禰
女房產之事日來可爲今日之由雖被仰于今無其
氣分之間御存知之旨頗不審云々獻返報申今日酉
剋可爲必定不可有御不審云々於申刻漸御氣分出
現之間醫師典藥頭時長朝臣陰陽師主殿助泰房
驗者清尊僧都并良親律師等參候酉終刻法印隆弁
參加而奉加持之則若君誕生奥州兼而被座此外
御一門之老若摠而諸人參加不可勝計頃之御驗
者以下祿各可賜生衣一領野劍一柄馬一疋也于
時三浦介盛時白直垂馳參抃悅之餘騎用所之馬

以置銀鞍。自令引泰房與。是名馬也。大嶋鹿毛云。抑此誕生祈禱之事。對相州若宮別當法印。不等閑被付示之。仍於鶴岡八幡宮寶前。從去年正朔。碎冊誠肝膽。夢告有之。同八月令班可賜之由。被申之上。今年二月。侍伊豆國三嶋社壇。而祈請之間。同十二日。寅刻夢告。白髮老翁法印曰。祈念所之懷婦來。五月十五日。西尅。可男子於平産也云。果如旨。奇特可謂歟。

廿一日　庚辰　七夜事。奥州令盡經營賜云。

廿七日　丙辰　天晴　新誕若君公。令歸住本所。賜其後募御祈之賞。以能登國諸橋保若宮別當法印。文覺。工藤三郎左衛門尉光泰爲御使。相州御書云。

清左衛門尉滿定　出羽前司行義
越前四郎經成　山名中務俊行
四番
攝津前司師貞　長田兵衛太郎廣雅
伊勢前司行經
皆吉大炊助文幸
五番
伊賀式部太夫入道光西　秋田城介義景
伊豆前司行方　明石左近將監兼經
内記兵庫亮祐村
六番
信濃民部太夫入道行然　筑前々司行泰

甲斐前司泰秀　　越前兵庫助政宗
太田太郎兵衛尉康宗
十日　己亥　貫處伺候於女房者可有領家之號
之旨被定之云々又曰百姓與地頭相論之事別叙奉
行人定委細尋可被聞食之由云々
十五日　甲辰　攝津前司師貞朝臣依病癈而被
遂出家法名行嚴云々
十九日　戊申天晴　若君御前不例令平癒賜云々
廿日　己酉　別付之事雖被結番之重々被歴其
左右縮六方欲三方
一番
前右馬權頭　攝津入道
和泉前司　　統前々司
大曽祢右衛門尉　　清左衛門尉
中山城前司　　明石左近將監
對馬左衛門尉　　越前四郎
二番
武藏守　　出羽前司
伊賀式部大夫入道　　太田民部大夫
對馬守　　武藤左衛門尉
山城前司　　越前兵庫助
皆吉大炊助　　進士次郎藏人
山名進次郎
三番

尾張前司　信濃民部大夫入道
秋田城介　常陸入道
伊勢前司　山名中務直景
伯耆右衛門尉　内記兵庫允
長田兵衛太郎

廿一日　庚戌　閑院殿末後所之事有其沙汰被
施行之所謂築壇百七十八本此内小路面十本家在
不五二條面七十二本油小路面六十一本自二條北
油小路面西洞院面三十五本新造又神社佛寺領
之外悉可所課於辨勤之由同被仰下御教書云
造閑院殿用途事
右於佛神之田者自本被除之到其外者令濟地
頭加微之所之者可致其沙汰之由各可加下知
之状依仰執達如件
建長三年六月廿一日　相模守
前攝津守殿　中原朝臣師員法名行厳　年廿七　勅教師
茂男也

廿二日　辛亥　小雨
廿六日　乙卯　小雨降　冷氣尤甚有氷如冬天云々
七月大
四日　壬戌　半晴　半陰寒氣猶未止今日京都之
飛脚到來去月廿七日被遂閑院遷幸造内裏功賞
將軍家令叙三品給相州正下被叙五位又彼時參
仕公卿以下參洪并除書等持參之云々

造閑院賞

從三位藤原頼嗣

從四位上藤原隆顯父大納言藤原朝臣讓閑院行事賞

同經俊閑院行事賞

造國司賞

藤原顕雅

正五位下平時頼

建長三年六月廿七日

左中將如元

從三位藤原頼嗣

左大夫小槻淳方

左衛門少尉中原章職

已上行事賞追可申請

左大將定雅

右大將公相

萬里小路大納言公基

權大納言實雄

三條大納言公親

今出川新大納言實藤

一條中納言公時

花山院權中納言師繼

別當通成

佐宰相

新中納言

新宰相

松殿三位中將

左兵衛督

中御門三位侍從

佐三位

新宰相

左近

近衛中將實春

高倉中將公陰

左中將基雅

持明院少將相保

三條新少將守資

八條少將公益

近衛新少將公春

右近

九條中將能定
楊梅少將經忠
楊梅新少將忠資
高倉少將茂通
法性寺少將雅任

左衛門
權佐

右衛門
權佐

左兵衛
佐親朝權佐行時
右兵衛

右中將伊賴
三條少將伊基
右少將資氏
小野宮少將後具

佐高望
左馬
權頭景氏
右馬
權頭伊信
鈴爰
藤少納言基時
反閇
陰陽頭良光朝臣
出車
近衛源少將資平
丹波守

權助經衡
丹波少將頼親

八日　丙寅天晴　風靜。今日相州室自産所令歸
往本里之亭賜。又將軍家令叙三品賜之後事更
於政所成御下文。
十日　戊辰　今日評定奴婢子十歳夫婦雖過同
居不依年紀之由被定下是青木入道依所從之事
也。
十八日　丙子天陰　雪降。奥山本三嶋之社爲令
奉勸請。卜其地賜。
廿日　戊寅　諸國民間訴訟。於出來者而收以前。
召符不可下之旨。今日政所問注所等被仰。
廿六日　甲申天晴　夕雨下雪下。有三嶋新宮上
棟之義。

卅日　戊子　雨降。凡此間風雨涉日。壞風災爲令
有西收豊稔祭風。伯可奉仕之由被仰。衛陰陽之道
諏方兵衛入道爲蓮佛奉行。

八月小

一日　己丑天晴　南風惡。今夕於由比浦被行風
祭之祭國繼爲親等奉仕之爲伊豆太郎左衛門尉
實保御使。
二日　庚寅天晴　風甚但入夜
三日　辛卯天霽　風少。今夕雪下及三嶋新宮遷
宮之義陪從御神樂有童舞延年等。
六日　甲午　勝長壽院小御堂者故禪定二位
家御遺跡。鶴岡異他然近年及破壞其跡已欲改仍

爲被加修理以紀伊國雜賀庄募料所於不日可終
功旨今日被仰備後前司康持付云云
十五日癸卯天陰　風吹今日鶴岡八幡宮放生
會也將軍家御出
行列
先陣隨兵
阿波四郎兵衛尉政氏　上野五郎兵衛尉重光
葛西壹岐新左衛門尉清貞　茂木左衛門尉知定
和泉次郎左衛門尉行章　武藤次郎兵衛尉頼泰
足利三郎家氏　城九郎泰盛
遠江六郎教時　越後五郎時家
次諸大夫
次殿上人
次公卿
次御車
大曾祢五郎　伊東大和十郎
土肥左衛門四郎實經　同三郎泰祐
小野澤次郎時仲　大泉九郎長氏
伊勢加藤左衛門尉　紀伊四郎左衛門尉
鎌田兵衛三郎義長　濱名三郎
山城二郎兵衛尉　肥後彌藤次
已上著直垂帶劔候御車左右
次御劔役人
尾張前司時章

次御調度役人

武藤左衛門尉景頼

御後布衣

相摸右近大夫將監時定　北條六郎時定

宮内少輔泰氏　上野前司泰國

小山出羽前司長村　前大藏權少輔朝廣

内藏權頭資親　出羽前司行義

新田三河前司頼氏　和泉前司行方

後藤壹岐守基政　遠江次郎左衛門尉光盛

梶原右衛門尉景俊　城次郎頼景

式部六郎左衛門尉朝長　彌十郎左衛門尉親盛

豐後四郎左衛門尉忠經　大曽祢左衛門尉長泰

出羽二郎左衛門尉行有

隱岐二郎左衛門尉泰清

彌善太郎左衛門尉康義

肥後次郎左衛門尉爲時

善布衛門尉康長　攝津左衛門尉

後陣隨兵

大曽禰左衛門尉盛經　常陸二郎兵衛尉行雄

田中右衛門尉知繼　伊豆太郎左衛門尉實保

小田嶋五郎左衛門尉義春

紀伊五郎左衛門尉爲經　足立左衛門三郎元氏

武石四郎胤氏

大須賀新左衛門尉朝氏

足立太郎左衛門尉直元

十六日　甲辰　去夜丑剋雨降。巳剋晴。南風吹。今日鶴岡流鏑馬以下馬場之義如禮。將軍家有御奉幣。供奉人等同昨日

廿一日　己酉　天晴。將軍家於由比浦御出。前右馬權頭武藏守老若無不扈從。奥州相州豫被候御桟敷。入御之後。先有献盃義。次覧遠笠懸。則又令射之給。御箭頻的中。人感焉。中次大逐者有之。諸遠縄内候敷皮。召頻射手。各參縄際之時。壹岐前司。有泰縄確執之氣。之由。称之急以故障之間。彼合手城九郎泰盛。同下馬畢。宴遊障碍也。泰綱代而可差伺候之人。進之旨。被相州申。相州殊固辞。縱射手雖有之數輩差御家人。置難進。差焉。況又於無其人。而耶。各不可然之由云云。然仰依再三。令進横溝五郎給。被用意横溝之具足之間。相州御弓箭行騰賜焉。御鎧唐櫃御弓征矢引目等被持之皆横溝預也。馬者内嶋右近入道勲騎。馬給。猟毛未立駒。縄際等只用于駕之。少路往反騎馬許也。仍今給拭汗。敢騎之。隨撿見數之。催促。雖參加。猶有斟酌。無本右。不發箭云云放犬四疋。及之時。始射之。始中終無其失。今日。逸興此事也。

尾張前司　相模右近大夫將監

陸奥四郎　武田五郎七郎

信濃四郎左衛門尉　加賀前司

幸嶋次郎　加地五郎次郎

遠江次郎左衛門尉　薩摩九郎
小山出羽前司　三浦
犬追者射手

一番
北條六郎　遠江太郎
城九郎　横瀧五郎
遠江新左衛門尉　小笠原余一

二番
遠江六郎左衛門尉　武田五郎三郎
薩摩七郎左衛門尉　大和次郎左衛門尉
城二郎　上野十郎

檢見

秋田城介　波多野出雲前司

廿三日　辛亥　評定衆中所勞於不參勤之輩不可乘著到之由有其沙汰不令辭其衆之程者不可書乘之旨被仰出云云。

廿四日　壬子天晴　將軍家重而有御濱出供奉人不知其數先御笠懸也鶴岡之別當法印隆舜於御桟敷伺候之間令加持御矢云云次犬追者有之

射手

一番
北條六郎　城九郎
佐々木壹岐前司　三浦介六郎
遠江新左衛門尉　小笠原余一

二番　武田五郎三郎
遠江六郎左衛門尉　信濃四郎左衛門尉
幸嶋二郎　上野十郎
城次郎
三番
小山出羽前司　氏家餘上
加地五郎次郎　土肥左衛門四郎
薩摩九郎　工藤六郎左衛門尉
撿見
秋田城介　出雲前司
九月大
五日　壬戌　武藏國務條々事、并西海諸國守護地頭沙汰之事等、有評定、是皆可救窮民之御計也、清左衛門尉梁澤山城前司等爲奉行。

十七日　戊戌　出舉利錢之事、所領於入流者、被下御教書之由、其外相論者、可有一向問注所之沙汰之由、被定云々。

十九日　丙子　相州爲果宿願、令參詣三嶋之社給、依然今日被始御精進云々。

廿日　丁丑　評定奥州申、被沙汰讃岐國海賊張本等、于關東召下、可被遣奥嶋之由云々。

廿三日　庚辰　相州三嶋之社、爲御奉幣、伊豆國御進發。

廿五日　壬午　今日未刻、幕府御馬鶴毛一疋於御

厩濃艶是御秘藏之御馬也號清海波云

廿八日　乙酉　相州三嶋之社御還著往反無其難云

閏九月小

一日　戊子　園城寺之事日來有其沙汰及御助成畿内散々御領乃貢爲彼料足也北院坊舍并鎮守社等被造營云清左衛門尉奉行云

十六日　癸卯天晴　戌刻天變出現火燈芒悉見人怪之

十七日　甲辰　依變異之于事御祈禱可有之由雖被仰下常度之變穴勝不可及御沙汰之趣司天等申之仍可被差置唯眼見心知雖謂之慶雲壽星見之旨申歟云

十月小

七日　癸亥天晴　藥師堂谷燒亡延二階堂大略南宇佐美判官藤柄家於到云

八日　甲子　戌刻相州新造御弟小新御移徙

十三日　己巳　貢馬見參奥州堺下出仕如禮云

十九日　乙亥天顔快晴　將軍家并三品相州新造御弟入御今夜御止宿也

供奉人

將軍御方

前右馬權頭　武藏守

相模右近大夫將監　陸奥掃部助

上野前司
小山出羽前司
和泉前司
佐々木壹岐前司
薩摩前司
城九郎
遠江二郎左衛門尉
遠江六郎左衛門尉
肥後次郎左衛門尉
彌次郎左衛門尉
伊豆太郎左衛門尉
常陸二郎兵衛尉

新田三河前司
内藏權頭
後藤壹岐守
大隅前司
伊賀前司
大曽祢左衛門尉
三浦介
和泉次郎左衛門尉
豐後四郎左衛門尉
薩摩七郎左衛門尉
田中左衛門尉
武藤次郎兵衛尉

狩野五郎左衛門尉
壹岐新左衛門尉
足立太郎左衛門尉

攝津新左衛門尉
善左衛門尉

三品御方

備前々司
越後五郎
陸奥四郎
同次郎
下野前司
梶原左衛門尉
出羽次郎左衛門尉
同四郎左衛門尉

遠江前司
武藏四郎
秋田城介
出羽前司
遠山前大藏少輔
大曽祢次郎左衛門尉
隱岐新左衛門尉
彦次郎左衛門尉

出雲五郎左衛門尉　阿波四郎左衛門尉
土肥左衛門四郎　小野澤次郎
彌善太郎左衛門尉　三村新左衛門尉
紀伊五郎左衛門尉　伊勢加藤左衛門尉
山城次郎左衛門尉

廿日　丙子　將軍家并二品相州從御弟還御亭
主御引出物等被令献之云云今夜太白輿驚鬼云云
大將軍廢云云

廿一日　丁丑　天晴　北風嚴寒氣殊甚今日相州
新誕若公五十日百日之義有之云云

廿三日　己卯　丑剋雷鳴一聲地震兩度云云

廿九日　乙酉　奥州相州并評定衆等於幕府別
參御所良久唯評定所之壁可被建之由有其沙汰被
尋陰陽道輩之處丑寅之方遊年也今年中不快之
由依勘申所被止其義云云

十二月大

十二日　丁酉　戌尅將軍爲御方違而奥州第入
御前右馬權頭武藏守遠江守以下供奉相州被參
諸云云是明年可被建小御所其地爲南方之間夜昼十
太白方也又日來改御殿御寢所可被用他處云云

十三日　戊戌　戌尅禪定二位家有御移徙之義
龜谷新造御弟入御被用御輿散位廣賢朝臣候又
閑賜禄二衣右近大夫仲親役之
扈從直垂立烏帽子

武藏守　尾張前司
遠江前司　陸奥掃部助
相摸右近大夫將監　北條六郎
越後五郎　武藏四郎
内藏權頭　安藝前司
小山出羽前司　出羽前司
和泉前司　越中前司
長門前司　大隅前司
伊賀前司　内藤肥後前司
出雲前司　伊勢前司
上野三郎兵衛尉　梶原右衛門尉
和泉二郎左衛門尉　信濃四郎左衛門尉
伊賀二郎左衛門尉　大須賀左衛門尉
肥後二郎左衛門尉　葛西前左衛門尉
出羽二郎左衛門尉　豐後四郎左衛門尉
下野七郎　城三郎
佐々木壹岐三郎

十四日　己亥天晴　寅尅太白迫犯鎮星

十五日　庚子天霽　以大菩薩之御影顕現之于別當坊奉入勸請云云。

十八日　癸卯　雨降京都之飛脚到著去十四日酉尅在右將軍家御祖母遠化日來食之由申。

廿二日　丁未　伊勢前司爲行經使節上洛依在后御事也自將軍家龍蹄以下給餞物云云。

廿七日　壬子　諏方三郎盛經為相州御使而上洛是又雅右御訪事也

廿九日　甲寅天晴　於相州御第被信讀大般若經關東安全御祈也

十二月大

二日　丁巳　宮内少輔泰氏朝臣所領於下総國恒生庄潛被遂出家年三十六即年來遂素懷云云偏山林斗藪之志挾焉云云是右馬頭入道正義嫡男也

三日　戊午　鎌倉中在々處々小町屋及買賣設之事可加制禁之由日來有其沙汰今日被置彼所所此外一向可被停止之旨嚴密觸之被御之處也佐渡太夫判官基政小野澤左近大夫入道光連等奉行之云云鎌倉中小町屋之事被定置處々

大町　小町　米町　亀谷辻　和賀江

大倉辻　乗飛和坂山上

不可繫牛於小路事

小路可致掃除事

建長三年十二月三日

五日　庚申　諏方兵衛入道之邊聊物忿夜半之刻人々加小具足於相州御第門前窺參依無其實而悉退且又被加制止云云凡荒説非一云云

七日　壬戌　宮内少輔泰氏自申出家之過依之所領下総國恒生庄被召離之陸奥掃部助實時給之是不諧之上小侍別當勞依尼也當庄者泰氏朝

臣始拜領之地始而入部之刻於此處有遂素懷不思議不謂之乎然泰氏朝臣各以爲相州縁者其上父左馬頭入道爲關東宿老頻雖嘆子細申依人而不可極法之由及御沙汰云云

十二日　丁卯　相州御第轉讀大般若經有諸願云云

十七日　壬申　將軍家爲御方違而武藏守朝直第入御從幕府并相州御第警巡頗嚴密云云

廿六日　辛巳　雹降　於地積之事三寸今日未尅之及一點而止上物忩也近江大夫判官氏信武藏左衛門尉景頼生虜了行法師矢作左衛門尉千葉介が近親長次郎左衛門尉久連等件之輩有謀叛之企云云

仍諏方兵衛入道爲蓮佛之承推問子細大田七郎康有而記詞逆心悉顯露云云其後鎌倉中彌騷動諸人競集云云

廿七日　壬午天晴　被誅謀叛之衆又有配流之者云云近國御家人群參如雲霞皆以可歸國之由被仰出也

建長四年壬子

正月小

一日　丙戌天晴　椀飯相州御沙汰

御劔　前右馬權頭　御調度　尾張前司

御行騰　秋田城介　同五郎
一御馬　武藏四郎　尾張二郎
二御馬　遠江六郎　壹岐三郎
三御馬　加地太郎左衛門尉
四御馬　肥後次郎左衛門尉　同四郎左衛門尉
五御馬　北條六郎　尾張二郎

二月　丁亥雪降　椀飯奥州御沙汰
御劔役　武藏守　御調度　備前々司
御行騰　出羽前司
三月　戊子天霽　椀飯左馬頭入道有沙汰
御劔　尾張前司　御調度　秋田城介
御行騰　和泉前司

今日將軍家并若君御前御行始相州第へ御
五日　庚寅天晴　評定始也奥州相州以下出仕
其後御輦所御行始奥州第二品信濃民部大夫入
道行然家渡御云々
七日　壬辰　子丑二時世上騷動諸人競馳著甲
曹揚旗幕府并相州御第馳參及曉更靜謐云々
八日　癸巳　幕府心經會也將軍家御出座如例
九日　甲午天晴　於相州御第宰家御懷姙爲祈
禱被始行於藥師講摩云若宮法印奉仕之云々
十一日　丙申雨降　酉刻雷鳴一聲今日鶴岡若
宮御供飯半二破又三百餘枚積疊之餅顛落次同
御殿與舞殿之間樋之内鵄一羽死此外大慈寺前

河中鶴出一羽死也

十二日　丁酉天晴　今夜戌剋有珎是刑部僧正長賢之靈也十二歳少女伊勢前司等女令小訖承久年中之旨之語申云件女遽有狂氣于長能僧都可對面之由所望之間其母不能抑留愁令同輿長能大倉坊行向於途中少女之自輿於僧都之家中馳入長能令揭焉之間語以往之事長能自聽焉頗執信時依彼母之勸併加持之試之少女云隱岐法皇之爲御使而從去比於關東令下向日來令住相州第之處隆辨法印陪彼亭而轉經之間護法天等柱杖件類被追出畢於今者歸洛之時院御所申焉而之後明年重而可下向也當時在柄有後山之間自於

被見此女姙之計今更不思儀乎云詞終令絶入之時移遽雖欲蘇生爲心神惘然云

十三日　戊戌　右大將家於法華堂被行恒例御事然工藤三郎右衛門尉光泰爲奉行參堂次去夜天狗靈託事歸參之後相州申之間召彼少女之母出就尋給言上委細今更信法驗令仰給云

十四日　己亥天晴有御弓始然多賀谷五郎景茂被加清撰記今日欲加射手之處今朝以相州安東左衛門光成爲御使而可然依不在射手可被止之由被仰小侍所仍被止之間合手海野四郎助氏同被止之殘之十人射二十五度云

射手

一番　一宮彌次郎時光　平井八郎清頼
二番　桑原平内盛時　山城三郎左衛門尉忠氏
三番　壷右近三郎　眞板五郎次郎經朝
四番　横溝七郎五郎忠光　布施三郎行忠
五番　武田七郎五郎政平　早河次郎太郎祐泰
廿七日　辛巳　未尅海濱波濤色如紅就中自由
比南至和賀江嶋如此諸人怪焉仍被行御占之處

吾妻鏡　三十四

二月大
一日　乙卯天晴　巳一點月三分正現
八日　壬戌天霽　子尅燒亡西之壽福寺之前寮
之名越山王堂前南者和賀江北者若宮大路上其
内無殘所
十日　甲子　鎌倉中狹小路之事無承之旨輙置
馬常後立之事飛脚不日出來之時於田舍立之事
此條々殊誡及御沙汰保々奉行人等被仰付處也
十二日　丙寅天晴　關東安全爲御祈於相州御
第被行如意輪法
廿日　甲戌　和泉前司行方武藤左衛門尉景頼

為使節上洛是奥州相州當將軍被辭執權申上皇第一三宮之間可有御下向之由依申請也其狀相州自染筆奥州被加判處也他人不知之云云

廿七日　辛巳　辰刻京都飛脚參著去廿一戌尅法性寺禪定殿下薨之由申之仍奥州相州以下人人群參云云彼薨御事云云有説等武家可有籌策之期也云云

廿八日　壬午天晴　申剋自腰越海上至和賀江津而池之水如血廣三丈許及晩消滅畢三河前司教進勘文云有漢家例之上去建保年中以後於此境此變及度々云云

新刊吾妻鏡卷第四十二

寛元元年八月十日為太子春秋七四年正月廿九日御受禪同三月廿一日御即位同五年正月三月御元服十一正元々年十一月廿六日御脫屣

正應三年二月十一日御落餝御法名素寶

攝政左大臣兼經第二度猪隈殿二男

寛元五年正月十九日更蒙攝政詔為氏長者賜隨身兵杖牛車如元建長四年十月三日辭攝政讓於左大臣康元二年三月八日出家法名真覺

正元二年五月三日薨年五十二

院諱久仁後嵯峨院第一皇子御母大宮院大政大臣後一公貴氏女

攝政左大臣 兼平

建長四年十月三日。蒙攝政詔。爲氏長者。十月三日。賜隨身兵杖。十一月十三日。任大政大臣。院講師 後嵯峨院第三皇子。御母同上。

正嘉二年八月七日。爲太子。春秋十 正元々年八月廿八日。御元服。十一月廿六日。御受禪。十二月廿八日。御即位。文永十一年正月廿六日。御脫屣。正應二年九月七日。御落飾。御法名金剛源

攝政左大臣 兼平

建長五年十一月八日。辭大政大臣。六年十二月二日。改攝政爲關白。但准攝政。去年三月廿一日。聽牛車

弘長元年四月廿九日。止關白。文永五年十二月二日。賜兵杖。六年正月十七日。始乘牛車參內。

關白右大臣 良實。第二度

弘長元年四月廿九日。更蒙關白詔。爲氏長者。

文永二年閏四月十八日。止關白。廿五日。更賜兵杖。七月十六日。遣勅使。文書如元。可有內覽由。被仰下之。十七日。始乘牛車參內。十月十六日。出家。九日。薨。年五十五

關白左大臣 實經 第二度

文永二年閏四月十八日。更蒙關白詔。爲氏長者。於兵杖者。左大臣時賜之。左右府生以下。爲隨身仍重無宣下。九月十二日。辭左大臣。執柄。第二度。十一月廿七日。乘牛車始參內。表文有勅許。十一月九日。辭關白。如元。五年十二月十四

日辭兵杖弘安七年五月十九日出家法名行西七月
十八日薨年六十二已上
當將軍一代自建長四年夏至文永三年秋
歟也
建長四年壬子
征夷大將軍一品中務卿宗尊親王 于時三歲 後
嵯峨院第一皇子御母宰相平朝臣棟子藏人勘解由次
官棟基女
正月小
八日 癸巳 晴親王家皇子皇第一於仙洞御首服
被用保延例加冠左大臣兼平年預左中辨顯雅
朝臣行今日事殿下直衣參給先是殿下被献親
王御袍立涌突打曝御笏紙巻藏人左衛門權佐
資定爲御使云云御加冠之後令叙三品御
九日 甲午 細雨下 親王御行始殿上人 騎馬
公卿六人連軒入御承明門院有御賜物
三月小
五日 己丑 辰刻京都飛脚參著于關東是先日
上洛使節和泉前司行方武藤左衛門尉景頼就奉
聞就宮御下向事自去一日於仙洞連々有其沙汰
殿下毎度參給但三歲宮服 大納言殿 十三歲宮二品殿 兩所
之間何御方可有御下向哉事依被尋仰下之兩六
波羅所馳申也奥州相州等會合被經群議十二歲
宮可有御下向之旨被申之仍及同日申刻飛脚歸

洛

六日　庚寅　藤次左衛門尉泰經爲御使上洛行程七箇日云云是官御下向之間條々事依被仰遣六波羅大夫將監長時朝臣也彼朝臣并可然在京人等可令供奉之由云云

十三日　丁酉　巳刻京都飛脚重象著宮御事可爲來十九日御進發之由云云

十六日　庚子　晴彼御下向御祈事今日奥州相州注連署御書被仰護持僧等云云即進請文云云

十七日　辛丑　天晴　一品親王關東御下向事於仙洞有御沙汰條々今日治定殿下被參又法親王仁助此間御祇候云云

十八日　壬寅　雨降　親王勅授　宣下上卿左大臣　兼平公云云　今日殿下被遣御馬於六波羅左親衛御使下總前司行經云是爲親王御共依可被下向關東也

十九日　癸卯　天晴　今曉　三品親王關東御下向也自仙洞入御六波羅御車吉田中納言爲經卿上御門宰相中將顯方公花山院中將長雅朝臣右中辨顯雅朝臣等連車辰一點令起六波羅給御輿也午尅著御于野路驛

御儲事

上料　御酒一瓶子本立　小御料　同御肴　八種菓子

女房四人　三本立酒一瓶子　小御料菓子同上

侍所 小續五十前菜五種汁二酒肴一具
力者小舎人等分。櫃飯廿五合。秣百束

御雑事

米卅石白米二石宜旨斗定大豆三石同斗秣二百卅束。
藁八百束糠十石薪二百卅束炭五籠送夫六十人
贄殿入物。上白米三斗宜旨斗。御菜二種 鳥八羽
入夜著御于鏡宿佐そ木壹岐前司泰綱儲雑事云。

上料

棚菓子十合。八種菓子御酒二瓶子御肴二折敷。居小
朝夕居六本立衛重朝夕居御料御菜七種追物御菜八種小御料御菜七種
朝夕追御菜二種汁物二。冷温。御肴一前三種。女房四人
二本立衛重御料菜七種召御料菜八種追物菜六種小御

料菜五種菓子二折敷八種酒一瓶子
侍所
小續五十前菜五種汁二冷温酒肴一具大餅
力者十二手上三手女房中九手并小舎人所
櫃飯廿五具別飯一櫃雑菜三種太瓶一荷折敷卅枚土器百大
小餅百廿前

御雑事

能米卅石白米二石宜旨斗定大豆三石同斗秣二百卅束
藁八百束糠十石薪三百卅束炭五籠
續松三百把油一升。贄殿入物。上白米送夫五十
人
廿日 甲辰晴 晝四十九院御宿。夜其浦。

廿一日　乙巳　晝野上。今日三位中將家。出幕府入御于入道越後守時盛佐介亭。若君御前入御于御毋儀龜谷亭。

廿二日　丙午　晝黑田　夜萱津

廿三日　丁未　晝鳴海　夜矢作

廿四日　戊申　晝波津　夜橋本　今日。行方景頼參著關東。自鏡御宿楊鞭之由申之。

廿五日　己酉　晝引間　夜池田

廿六日　庚戌　晝懸河　夜菊河

廿七日　辛亥　晝豆部　夜手越

廿八日　壬子　晝蒲原　夜木瀨河

廿九日　癸丑　晝鮎澤　夜閑本

四月大

一日　甲寅天晴風靜　寅一點親王自關本御出。未一尅出御固瀨宿御迎人々參會此所。小時立行。列先女房各舞車。美濃局別當局。一條局。大納言通西御方。士御門內大臣通親公女也。諸大夫侍各一人。在共此外。女房雜色外。無僮僕。

次隨兵二行

足利次郎顯氏　三浦介盛時

武田五郎三郎政經　小笠原餘一長澄

城次郎頼景　下野四郎景經

陸奥七郎業時　尼張次郎公時

相摸右近大夫將監時定　備前々司時長

次。將裝束二行弓矢

大隅太郎左衛門尉　伯耆太郎左衛門尉
長門守時朝　遠江次郎左衛門尉光盛
佐々木壹岐前司泰經　後藤壹岐前司基政
武石次郎　武石三郎朝胤
遠江六郎教時　越後五郎時貞
河内守祐村　出羽二郎左衛門尉行有
甲斐太郎時秀　城九郎泰盛
陸奥彌四郎時茂　小山出羽前司長村
足利太郎家氏　北條六郎時定
尾張前司時章　陸奥掃部實時
武藏守朝直
次御輿上御簾御服顯文砂薄黄御狩衣紅御衣紫御袴袴指腰内御力者三手。

次公卿
土御門宰相中將顯方卿
次殿上人
花山院中將長雅朝臣布衣
次諸大夫
右馬權助親家
次醫陰道
采女正丹波忠茂
次自京供奉人々
陰陽少允安倍晴宗
波多野出雲前司義重
佐々木加賀守親清相並
長井左衛門大夫泰重
左近大夫將監長時記上狩衣
東後騎清人
路次自稲村崎經由比濱鳥居西到二下馬橋。

暫扣御輿前後供奉人各下馬中下馬橋東行經小
町口入御相州御亭于時申一點也奥州相州前右馬權頭
政村甲斐前司泰秀出羽前司行義下野前司泰綱
秋田城介義景等豫候庭上御輿入南門寄寢殿上
御門宰相中將被候之其後有垸飯之儀奥州沙汰
給先出羽前司行義申時刻次親王出南面兩國司
被候御所切妻地下座敷皮相公羽林參進上御簾三
箇間御座間并東西次前右馬權頭政村持參御劍入南門
經庭上昇自寢殿沓脱置御座之傍帰著本座次御
弓張前陸奥左近太夫將監長時次御行騰皆後藤
左衛門尉基綱
次御馬置轡

一御馬　備前々司時長　遠江六郎教時
二御馬　足利太郎家氏　上総三郎滿氏
三御馬　遠江次郎左衛門尉光盛
同六郎左衛門尉時連
四御馬　大曽祢太郎左衛門尉長泰
同次郎左衛門尉盛經
五御馬　北條六郎時定　工藤左衛門尉高光
亦砂金百兩南庭十羽一箱被奉之此外兼被納御
塗籠物等羨精好絹五十疋羨絹二百疋帖絹三千
疋紺絹二百端紫五十端糸千兩綿二千兩檀紙三
百帖厚紙二百帖中紙千帖次被納御厨子中物砂
金百兩南庭十兩次御服二重織物御狩衣萠黄二

御衣白御單二重織物御袴濃下袴御直垂十具
織物村濃五具　御小袖十具御大口一唐織物御衣一領
御明衣一今木一次女房三人分上臈二人巻絹十
疋帖絹十疋紫十疋染物十色々下臈巻絹十疋紫十疋染物十色々等也各被置休
所云云

二日　乙卯天晴　城次郎頼景為御使上洛無為
御下著事為被奏聞也今日埴飯秋田城介義景和
泉前司行方申刻限御免武藏守朝直御弓矢陸奥
掃部助實時御行騰皆秋田城介義景

次御馬

一御馬　相摸右近大夫將監時定
相摸式部大夫時弘

二御馬　伊勢前司行經
信濃四郎左衛門尉行盛

三御馬　出羽次郎左衛門尉行有　同三郎行賢

四御馬　和泉次郎左衛門尉行章　同三郎行家

五御馬　越後五郎時員　梶原左衛門尉景俊

次帖絹百疋納櫃十合長櫃二十合内々献臺所被納金龍云云

三日　丙辰天晴　埴飯疑正義沙汰之利左馬頭入道下野前
司泰經申刻限尾張前司時章持參御劍御調度相
摸左近大夫將監時定御行騰皆出羽前司行義帖
絹百疋進之儀如例云云今日前將軍并若君御所御
母儀二位殿等御上洛而已去月廿一日御出御所今日
為重服尤可有憚歟之由陰陽道雖申之不能御許

寄遂以御進發云々

供奉人

陸奥七郎業時　相模八郎時隆　縫殿頭師連

越中前司頼業　河内前司祐村

路次奉行

筑前々司行泰　大曽祢上総介

大隅前司親貞

城三郎　上野彌四郎左衛門尉時元

出羽次郎左衛門尉行有　嶋津大隅修理亮久時

大曽祢五郎兵衛尉　小野澤次郎時仲

伊東八郎左衛門尉　伊東三郎　本間山城次郎

左衛尉　都筑九郎　雖非二催促人一自二若君一御所奉公之間令参

護持僧

法印成惠　權少僧都寶瀧

醫師

施藥院使廣長

陰陽師

大舍人助國繼

又御格子上下事被定人數云々。其番帳和泉前司行方。令清書之

定

御格子番事　次第不同

一番

陸奥彌四郎時茂　越後五郎時貞

足利次郎顯氏　大藏權少輔朝廣
下野七郎經綱　那波右近大夫政茂
城次郎頼景　武藤左衛門尉景頼
筑前次郎左衛門尉行頼
和泉五郎左衛門尉政泰
足立三郎左衛門尉光氏
伊豆太郎左衛門尉兼保

二番

北條六郎時定　伊賀前司時家
駿河新大夫俊定
城五郎重景
遠江次郎左衛門尉光盛
太曽祢次郎左衛門尉盛經
土肥三郎左衛門尉維平
和泉次郎左衛門尉行章　出羽三郎行資
佐々木四郎兵衛尉泰信　河内三郎祐氏
肥後四郎兵衛尉行定

三番

相摸式部大夫時弘　遠江太郎清時
大隅前司忠時　梶原右衛門尉景俊
能登右近藏人　信濃四郎左衛門尉行盛
肥後次郎左衛門尉爲時　式部兵衛太郎元政
武藤右近將監兼頼　狩野五郎左衛門尉爲廣
加藤左衛門三郎景經　相馬次郎兵衛尉胤經

四番

遠江六郎教時　武藏太郎朝房
長井太郎時秀　肥後前司爲定
出羽次郎左衛門尉行有　安藝右近藏人重親
小山七郎宗光　彌次郎左衛門尉親盛
筑前三郎行實　常陸次郎兵衛尉行雄
土屋太郎左衛門尉忠宗　武藤次郎兵衛尉頼泰

五番

三河前司頼氏　城九郎泰盛
相模八郎時隆　上總三郎滿氏
長井藏人泰元　隱岐二郎左衛門尉行氏
出雲六郎左衛門尉宣時
伊賀次郎左衛門尉光房

薩摩七郎左衛門尉祐能
大須賀次郎左衛門尉弼氏
豐後三郎左衛門尉忠直
山内新左衛門尉成通

六番

越後右馬助時親　壹岐前司基政
同五郎左衛門尉基隆　大友式部大夫頼泰
上野五郎兵衛尉重光
伊東六郎左衛門尉頼平
小野寺四郎左衛門尉通時　長雅樂左衛門尉
平賀新三郎惟時　鎌田兵衛三郎義長
右守結番次第無懈怠可參勤但上格子者日出以

前各令參上於晴尚者無左右可奉之至御寢所近
辺者可相待御定下格子者可為秉燭之刻限於翌
朝者當番衆參上之後可退出當番衆若悉有故障
之時者雖何箇日先番衆可令參勤至無故不參之
輩者殊可有其沙汰也者依仰所定如件

建長四年四月日

四日　丁巳天晴　於相州　親王家御濱出并御
弓始以下日次等事有其定大藏少輔泰房申云十
四日壬申云陰陽大允晴茂申云十四日為吉日壬
日頗不宜自戊辰忌遠行五離日也就中被用兵杖
可有憚云泰房亦申御的始先々被用此日云晴茂
申的始毎年式也是初度之儀難被准恒例云兩儀
猶不落居明日重可有沙汰云

五日　戊午天晴北風烈御濱出以下日時事為被
問為親文元等於相州又泰房晴茂晴宣時宗等同
參加旅相論之趣晴茂所申有其謂之由各勘申之
仍可為來十四日之旨治定云及晩六波羅留守飛
脚小林兵衛尉到著是所持參將軍宣旨案文也
正文來十一日可被請取官使權少允已可進發云
奥州相州被參會令披見之給而彼官便下向響禄
事尋先例可有其沙汰之由被經評議之處建久記
不分明之由出羽前司行義民部太夫康連等申之
云宜旨狀云

三品宗　親王

右被左大臣　宣旨件親王宜爲征夷大將軍。

建長四年四月一日大外記中原朝臣師兼奉。

七日　庚申天晴　陰陽道奉勘文近日歲星增光色々潤澤明也依吉瑞勘申云和泉前司行方持參御所備上覽云云

十二日　乙丑依可有御參鶴岳被催供奉人明後日十四日將衣上括袖此後夜以前可被參勤之狀者所被載散狀與也云云

十四日　丁卯霽　寅一刻將軍家始御參鶴岳之八幡宮前陰陽權大允晴茂朝臣束帶候殿中門花山院中將長雅朝臣被候陪膳尾張前司時章朝臣爲役送物御劍相州被相具帯劍令供奉給也

供奉人

公卿

土御門宰相中將顯方　御直衣

殿上人

花山院中將長雅朝臣　伊豫中將松朝臣

坊門少將清基朝臣　二條少將兼教朝臣　束帯

陸奥守重時朝臣　相模守　御劍役

前右馬權頭　武藏守朝直

尾張前司時章　陸奥左近大夫將監長時

相模右近大夫將監時元

此外

後藤佐渡前司基經　出羽前司行義

下野前司泰經　前大宰少貳爲佐
秋田城介義景　和泉前司行方
後藤壹岐前司基政　長門守時朝
伊勢前司行經　出羽前司長村
伊賀前司時家　那波左近太夫將監政茂
象河前司賴氏　能登右近大夫仲時
豐後四郎左衛門尉忠經
和泉五郎左衛門尉政泰
遠江二郎左衛門尉光盛
同六郎左衛門尉時連
大曽祢二郎左衛門尉盛經
武藤左衛門尉景賴　隱岐三郎左衛門尉行氏
足立二郎左衛門尉元氏
伊賀六郎左衛門尉朝長　押垂左衛門尉基時
將野五郎左衛門尉爲廣　長左衛門尉朝連
信濃四郎左衛門尉行忠
伊東六郎左衛門尉祐盛
陸奥七郎左衛門尉祐能
伊豆太郎左衛門尉宗保
彌次郎左衛門尉親盛
足立太郎左衛門尉直元　梶原左衛門尉景後
一宮善右衛門尉康長
上野三郎左衛門尉資經　東中務少輔徹重
著直垂帶刀輩名　猴仰　輿左右

南部又次郎時實　出雲五郎左衛門尉宣時
壹岐新左衛門尉基頼　三村新左衛門尉時親
豐後四郎兵衛尉忠經　肥後四郎兵衛尉行定
小笠原余一太郎　土肥四郎實經
加藤三郎景經　武田五郎七郎政平
伊豆八郎景實　大泉九郎長氏
一宮右衛門二郎康有　大曽祢左衛門太郎長經
河内三郎祐氏　澁谷二郎太郎武重
武藤七郎兼頼　梶原右衛門太郎景經

隨兵

備前々司時長　陸奥掃部助實時
北條六郎時定　足利太郎宗氏
陸奥彌四郎時氏　尾張次郎公時
越後五郎時負　駿河四郎兼時
城九郎泰盛　小笠原余一長澄
以上先陣

長井太郎時秀　下野四郎景經
三浦葉名遠江守光盛　三浦介盛時
出羽三郎行資　伯耆左衛門四郎清時
和泉四郎左衛門尉行章　田中右衛門尉知繼
結城上野十郎朝村　武石三郎朝胤
武田五郎政經　阿曽沼次郎光經
以上後陣
撿非違使

佐々木近江大夫判官氏信
同隱岐判官泰清
宇佐美大夫判官祐泰
隨兵參進之處臨期被止之陸奥掃部助實時遠江
守光盛者改著鎧於布衣令供奉云自右大將家至
于三位中將家被紀綱軍威儀御出毎度雖爲一兩
人勇士莫不令供奉而於親王行啓者其儀強不可
然向後依此事可被召具隨兵云凡御車等不具之
間令度儀式不及被刷之云路次小町大路北行政
所西行到鳥居南下御日出以前御神拜事終還御
云辰刻爲秋田城介義景奉行故可有政所始之由
被仰下之仍兩國司布衣被參政所各著座奥州奥
州相
模常所執事前伊勢守行經儲盃酒有三献之儀次
進御引出物御馬先献奥州次進相州云次兩國司
自政所令歸參給次人々著庭上座將軍家御直衣
出御寢殿南面土御門宰相中將奥方御直衣自西方參
進揚御座間并左右二間御簾次奥州被參御前簀
子伊勢前司行經持參吉書官覽蓋奥州取之被置御
前御覽之後給之令歸著本座給次奉兵具先御劔
武藏守朝直持參次御弓箭尾張前司時章役之後
次御鎧御甲冑御鎧直垂御櫛笥御
備前々司時長次御野矢陸奥左近大夫將監長時
次御行騰沓掃部助實時御馬三疋
一御馬鴛毛置鞍

陸奥彌四郎時茂
淺間四郎左衛門尉忠影
二御馬（黒鵠毛置鞍野鞍）
長井太郎時秀　經嶋三郎左衛門介泰久
三御馬（鴉毛置鞍野鞍）
城九郎泰盛　同四郎時盛
次乘御簾。次御弓始。射手六人。（乙鳥帽子。水干。下括。淺沓。）入南門
候弓場左右小筵而出御廊。（兼載大文高麗端の座）義景持參射
手記被置御前退候。蒙御旨。下座。二鏑射手
一番　二宮彌次郎時元　早河次郎太郎祐泰
二番　河野左衛門四郎通時　桑原平内盛時
武田五郎七郎政平　眞板五郎次郎經朝

一五度射訖之後入御人々參堂上行埦飯。一如元
三之儀。次可有評定始之旨被仰出。秋田城介奉行
奥州以下參上。各著座。
奥座
陸奥守
武藏守朝直
端座
相摸守
民部大夫康連
對馬守倫長
右馬權頭政村
前出羽守行義
秋田城介義景
前尾張守時章
清左衛門尉清定
大神宮八幡宮以下大社。可被奉神馬之由。被定。
是御下向無爲之上。依爲將軍始也。評定訖。兩國司

持參事書給御覽之後被施行之御幣神馬可被奉
献之所々京都十八社關東鶴岳宮伊豆箱根三嶋
及武藏國鷲宮已下諸國二宮惣社云云次及晩始著
御直垂有御乘馬始之儀小山出羽前司長村三浦
介盛時秋田城介義景等奉扶持之奥州相州武藏
守尾張前司陸奥掃部助出羽前司等列著于敷皮
於鞠御蹴有此儀御馬者相州所被進也
十六日　己巳天晴　今年鶴岡臨時祭事三月三
日四月三日兩度未被行之三月者前將軍三位中
將家依御輕服延引四月者當將軍御下向爲近々
之間被閣之旁非無其怖早可遂行之旨被仰下仍
今日仰陰陽道被擇日次且每臨時祭前々將軍必
有御參宮於向後者被止其儀御奉幣者可被用御
使之由治定是親王行啓不可輙之趣依有其沙汰
也

十七日　庚午天晴　於御所御鞠始之儀人數
上御門宰相中將　右馬助親家
二條中將兼教朝臣　相摸守
右馬權頭政盛朝臣　陸奥掃部助實時
城九郎泰盛　上野十郎朝村
工藤二郎右衛門尉元泰　所右衛門尉行久
瀧口兵衛尉行信　東中務少輔胤亀
三村左衛門尉時親申筭以三百爲數
廿日　癸酉　可被改引付番文之旨有其沙汰今

日以評儀之次被加人數秋田城介大田民部大夫
康連等奉行之
廿一日甲戌天晴　入夜雨降今日御所造營事
有評議被召陰陽道勘文仍晴光爲親以平等書載
子細於一紙進上云和泉前司行方爲奉行
廿二日乙亥天晴　難波刑部卿宗教參入去比
自京都參著依可有御鞠會也相州令談人數以下
事給御問答及三箇度云
廿四日丁丑天晴　御鞠也將軍家出御土御門
宰相中將上簾其後人々集立光泰進出懸中央矣
右膝置御鞠
難波刑部卿上鞠是土御門宰相中將布衣
二條少將兼教朝臣布衣　相州同　錦革鞦
右馬權頭同　武藏守同
出羽前司行義　紀瀧口行宣
此外
結城上野三郎兵衛尉廣經　下野法橋行俊
小山出羽前司長村布衣　城九郎泰盛
工藤三郎左衛門尉光泰
數三百三村左衛門尉計申之尾張前司佐渡前司
秋田城介義景前太宰少貳爲佐能白見證及脫
事訖
廿九日壬午天晴　於相州可被壞棄古御所事
五月憚否有其沙汰陰陽師等依召參上被尋所存

之處各申狀不一撥所謂晴賢晴茂申可憚之由以
平申云於被壞棄者更無憚又禁忌方同之云云爲親
申云壞家屋事五月有憚云云勿論也但是爲棄置之儀
不可有憚云云就面々申詞被凝評議相州被仰云云古
賢云我居宅於壞者大將軍王相凡不忌云云況於前
將軍幕下哉云云仍雖五月可被破却之由被定云云
卅日　癸未天晴　引付加二方爲五方以民部太
夫藤原行盛法師爲四番頭秋田城介藤原義景被
定五番頭一二番頭人如元云云

引付

一番　二日
前右馬權頭政村　佐渡前司基綱
備後前司康持　伊勢前司行經
中山城前司盛時　内記兵庫允祐村
山名次郎行直

二番　七日
武藏守朝直　出羽前司行義
伊賀式部入道光西　清左衛門尉滿定
越前兵庫助政定　皆吉大炊助文幸
對馬左衛門尉仲康

三番　十二日
尾張前司時章　陸奥掃部助實時
常陸入道行日　大曽祢左衛門尉長泰
新江民部大夫必基　大田太郎兵衛尉康守

長田兵衛太郎廣雅

四番 廿三日

信濃民部大夫入道行然　和泉前司行方

對馬前司倫長　武藤左衛門尉景賴

深津山城前司俊平　甲斐前司宗國

山名中務丞俊行

五番 廿七日

秋田城介義景　筑前々司行泰

三河前司教隆　大田民部大夫康連

進七次郎藏人　明石左近將監兼經

越前四郎經朝

五月小

一日　甲申天晴　鶴岡宮恒例御神樂也而上宮寶殿御戶不被開自卯刻及午一點神主依申子細被行御占如卯刻者不快午刻爲吉兆云於御膳者可備大床之由相州被計申之

二日　乙酉天晴　召工等於宮寺被開御戶之處鑠舌折云云

五日　戊子天晴　於相州御方爲出羽前司行義奉行御所造營將軍家御方違事有其沙汰陰陽道六人參入被尋仰之當時可被儲御本所於何方哉云云爲親申云四十五日御連宿所無之然者西乾方共以無憚亦曰四十五日以後秋節一度可有御方違者儲御本所於此可宜且御下向之後于今無御

行始之儀。五月中。聊有懈云。廣資以平同之晴賢晴
茂申云。雖四十五日以後備御本所於遊年方事無
懈云。文元申云。近代一夜方違定事也西乾共以無
懈云。者秋節可被儲御本所於北方之由評定畢亦
龜谷方角若向見定之。可申之由被仰下之間祈雨
行方景頼等令引率彼六人。登窟堂後山上。即歸參
當乾方之由。一同申之云云

七日　庚寅天晴　巳刻。地震。自今日被行祈雨御
祈。松殿法印良基大政法眼親賢加賀法印定清等。
奉仕之。亦爲同御祈。行靈所七瀬御祓。晴茂宣賢爲
親。廣資晴憲以平晴秀等勸之。

八日　辛卯　終日微雨。降御祈禱靈驗炳焉者歟。

十一日　甲午天晴　被行祈雨賞。僧衆砂金陰陽
道御劔。伯耆前司光平小野澤修理亮分遣之云云

十七日　庚子陰　奥州。相州。并前與州。前長州以
下。參會評定所。將軍御方違事。被經評議。以奥州亭
可被用御本所云云。而自當御所相州當西方。大將軍
方可有懈由。晴賢晴茂爲親。廣資晴憲以平晴宗等
一同申之。仍被定出羽前司長村車大路亭云云。自當
御所正方南也

十九日　壬寅天晴　御本所事長村宿所。聊依有
其煩。亦被問陰陽道之處。晴賢以下申云。龜谷泉谷
右兵衛督教定朝臣亭。自當時御所北方也。被用御
本所之條。可宜云云。仍治定云云

廿二日　乙巳　雨降辰刻從五位下行右近將監平朝臣時兼卒

廿六日　己酉晴　今日被壞右兵衛督泉谷亭爲御方違本所依可有新造儀也奉行人佐渡前司基經出羽前司行義清左衛門尉滿定安東藤内左衛門尉光成陰陽師前太膳亮爲親以平等行向彼所沙汰之

六月大

二日　甲寅陰　巳刻御所事始也前佐渡守基經前出羽守行義等奉行之午尅被始行禪定并五方引付云。今日爲將軍家御祈可修藥師護摩之由被仰下云

十日　壬戌天晴　御所築地以下事被催諸御家人云

十六日　戊辰天晴　將軍家聊御惱亦炎旱涉日間爲御祈被行赦及數十人云

十七日　己巳天晴　大和守從五位上藤原朝臣祐時卒

十九日　辛未天晴　祈雨事被仰鶴岡別當法印隆辨清左衛門尉滿定帶其御教書爲御使行向彼雪下本坊仍申領狀及申尅於八幡宮東廊始行北斗法晩天聊陰云。是去十日爲和泉前司行方奉行雖被仰下固辭昨日十八日相州有御對面親王家御下向之後天下泰平關東靜謐之處旱魃一事

已百人庶懸歎殊可被祈請之旨令懇望云云今日六
波羅使者參著去八日宣明門院崩御云云
廿一日　癸酉　雨降卯剋小野寺四郎左衛門尉
通時爲使節上洛依女院御事也
廿三日　乙亥自半更甚雨凡去十九日若宮別當
奉祈雨法之處自同廿日至昨日連日降雨之間申
剋被送御馬御劔武藤左衛門尉景頼爲御使
廿五日　丁丑天晴　諸寺佛供灯油等追日及陵
廢絶住持訴申之仍今日自其沙汰被下御教書云云
其狀云
諸堂寺用供米事
支度無沙汰之間有其訴就中大慈寺者右大臣
家建立異于他之間可專御佛事之處雜掌等存疎
略致緩怠之儀尤以不便早尋明子細可被申沙汰
之狀依仰如達如件
建長四年六月廿五日　相模守
陸奥守

秋田城介殿

七月大

四日　丙戌天晴　午刻秋田城介義景妻女子平
産云云號堀内殿是也今日小侍所式條被定之云云
六日　戊子　去月廿三日甘雨以後炎旱又及數
日仍祈雨事被仰勝長壽院永福寺明王院等行方
景頼奉行之云云

八日　庚寅陰　小雨酒中刻霽宣家爲御方違入
御于右兵衛督教定朝臣泉谷寓所新造來
御出行列
先御輿被上御簾
御劔役人折烏帽子　上野十郎朝村
相模右近太夫將監時定　武藤七郎兼頼
加藤三郎景經　武部兵衛太郎光政
武田五郎七郎政平
南部又次郎時實　豐後三郎左衛門尉忠時
土肥四郎實經　大泉九郎　長氏
海上彌次郎弘景
上著直垂折烏帽子令帶劔列歩于御輿左右
次御後
宰相中將顯方卿
右兵衛督教定朝臣
已上布衣騎馬
陸奥掃部助實時　城九郎泰盛
已上御輿寄立烏帽子
遠江守時直　足利太郎家氏
陸奥彌四郎時茂　前出羽守長村
大藏權少輔朝廣　前和泉守行方
前壹岐守泰經　前三河守頼氏
前越中守頼業　前伊豫守行經
遠江次郎左衛門尉申障之間爲其依別仰供奉
遠江六郎左衛門尉時連

武藤左衛門尉景頼　大曽祢左衛門尉長泰
已上折烏帽子直衣騎馬
次女房輿　一條局　別當局
東御方
以上舁連之各侍一人烏帽子直垂立烏帽子
次雑仕等

九日　辛卯天晴　已尅將軍家自龜谷還御供奉
入同昨日今日新御所門上棟亦當時御所相州御亭壞
南面平門始被新造門是相州御沙汰也
十日　壬辰天晴　自初夜甚雨如沃近國早魃之
間青苗悉黄枯民庶莫不愁之仍今日爲秋田城介
奉行重可抽祈之旨被仰鶴岡別當法印隆辯即
申領狀於當宮八幡寶前修諸神供有管絃等又於
瑞離之内手自被講最勝王經其後無程降雨云云
十四日　丙申　來月放生會御參宮供奉人散狀
迴之處悉以有進奉但大藏少輔朝廣阿波前司朝
村兩人許申障云云又御拜賀供奉人事同以被相催
之來八月可有御拜賀各如法卯刻以前可被參勤
之狀依仰所迴如件者所被載散狀奥也
廿日　壬寅　又有御方違供奉人者無違先度之
儀歩行數之中上野七郎左衛門尉出羽三郎左衛
門尉等申障越中四郎左衛門尉始者進奉後又申
障之間臨出御之時被召具加藤三郎云云
廿一日　癸卯天晴　御所居礎等

廿三日　乙巳天晴　入夜雨降寅剋大地震今月

將軍家御方違以前供奉人

御劔役

遠江六郎教時

歩行

遠江十郎頼連　土屋新三郎光時

大曽祢太郎長經　小野寺新左衛門尉行通

武藤次郎兵衛尉頼泰

進士三郎左衛門尉宗長　鎌田三郎義長

加藤三郎景經

以上御駕左右

次御後騎馬

武藏前司朝直

陸奥掃部助實時

壹岐守基政

伊賀前司時家

能登右近藏人仲時

小山五郎左衛門尉時長

遠江次郎左衛門尉光盛

和泉五郎左衛門尉政泰　城次郎頼景

阿曽沼小次郎光經　豐後四郎左衛門尉忠經

武藤左衛門尉景頼　東中務少輔胤重

備前々司時長

出羽前司行義

和泉前司行方

筑前々司行泰

隱岐判官奉清

廿四日　丙午　雨降早旦奥州令參御方違御所給其外人々群參巳刻屬晴有還御之儀

廿八日　庚戌　相州被修北斗供是室家懷妊御祈也

八月小

一日　癸丑天晴　親王家令任征夷大將軍御之間可有御拜賀于鶴岡八幡宮之由雖有被定之儀所被停也但於供奉人散狀者被召置御所云陸奥掃部助披覽之云云

御拜賀供奉人次第不同布衣

陸奥守　相摸守

御劔

前右馬權頭　尾張前司時章

武藏守朝直　右近大夫將監時定

陸奥掃部助實時　備前々司時長

陸奥彌四郎時茂　武藏太郎朝房

遠江太郎清時　那波左近大夫政茂

三河前司頼氏　佐渡前司基經

小山出羽前司長村　大藏權少輔朝廣

秋田城介義景　出羽前司行義

和泉前司行方　能登右近大夫仲時

伊賀前司時家　大隅前司忠時

伊勢前司行經　壹岐前司泰經

遠江次郎左衛門尉光盛　城二郎頼景

梶原右衛門尉景俊　出羽次郎左衛門尉行有

豐後四郎左衛門尉忠經

大曽祢左衛門尉長泰　武藤左衛門尉景頼
信濃四郎左衛門尉行忠
常陸次郎兵衛尉行雄
将野五郎左衛門尉爲廣
肥後次郎左衛門尉爲時
隨兵
尾張次郎公時　北條六郎時定
足利太郎家氏　相模八郎時隆
三浦介盛時　城九郎泰盛
長井太郎時秀　下野七郎經綱
上野五郎兵衛尉重光
大曽祢二郎左衛門尉盛經
阿波四郎兵衛尉政氏　阿曽沼小次郎光綱
佐竹常陸次郎長義　武田三郎政經
南部次郎實光　和泉次郎左衛門尉行章
大須賀次郎左衛門尉徹氏　武石四郎
越中四郎左衛門尉時業
伊豆太郎左衛門尉宗保
直垂著
上野彌四郎左衛門尉　同十郎
益戸三郎左衛門尉　城三郎
出羽三郎　壹岐新左衛門尉
佐々木四郎左衛門尉　相馬次郎左衛門尉
武藤次郎兵衛尉　平賀新三郎

宇佐美五郎右衛門尉　伊東三郎
澁谷左衛門尉　色部左衛門尉
小早河美作次郎兵衛尉　加藤三郎
伊達次郎　大須賀左衛門太郎
鎌田次郎兵衛尉　大泉九郎

二日甲辰天晴　風靜已尅新御所立柱上棟也
奥州并評定衆御家人等出仕濟々焉及晩頭大工
以下匠等賜禄物

四日丙辰天晴　將軍家聊御惱醫師忠茂朝臣
廣長々世等參候御療治事及評議云々

五日丁巳天晴　將軍家御惱御祈禱事被仰云々

六日戊午天晴　今日又依可有御方違供奉人
人參進　可令御劍役歩儀
式部大夫時弘　地條六郎時定
尾張次郎公時　遠江太郎清時
大隅前司忠時　和泉前司行方
近江太判官氏信
大曽禰次郎左衛門尉盛經
彌次郎左衛門尉親盛
武藤左衛門尉景賴
出羽次郎左衛門尉行有
隱岐三郎左衛門尉行氏
伊野五郎左衛門尉爲廣
伊豆太郎左衛門尉實保

小野寺四郎左衛門尉道時
押垂左衛門尉基時　信濃四郎左衛門尉行忠
常陸兵衛尉行雄　足立三郎左衛門尉元氏
已上可爲騎馬
武藤次郎兵衛尉頼泰　同七郎兼頼
平賀新三郎惟時　加藤三郎景經
伊達次郎　足立三郎
已上可爲歩行

欲有御出之處御惱之間延引仍被行御祈禱泰山府君晴茂鬼氣爲親靈所七瀬晴元文元晴長晴秀以平國高重氏士公晴秀等云尾此御不豫事自去月上旬之比時々令發給於今者不被開食御膳報人驚駭歎息之外無他事仍今日御祈療事於御所及評議與州相州前右馬權頭政村前武藏守朝直前尾張守時章前出羽守行義秋田城介義景等參候前和泉守行方武藤左衛門尉景頼奉行之少清左衛門尉滿定爲之使召入鶴岡別當法印隆辨於廟御所城介傳群議之趣於法印云此君仙洞御鍾愛之一宮也東關諸人懇望不等閑之間爲三位中將殿御替御下向非武家肩自乎而御惱逆日之間顯密御祈雖被盡其數祈療失術旬日空遷於諸壇御祈者今朝甘所被結願也御入營之始貴神被致無爲御祈禱今度安全事同可被疑一身之懇丹之旨議定訖者法印申領狀

七日　己未天晴　法印隆辨於御所中自初夜始
行御不豫安寧御祈千手法療腹病信讀大般若經
云云

十日　壬戌天晴　將軍家御惱聊御減被聞食御
粥云云

十三日　乙丑天晴　將軍家御温氣退散被聞食
御膳之間諸人成安堵之思云云

十四日　丙寅　放生會御參宮供奉人散狀披覽
之雖有御惱被召出之被下御點云云
可爲十五日御願役前右馬權頭武藏守朝直
相摸右近大夫將監時定駿河四郎兼時
安藝前司親光　那波左近大夫政茂
遠江守時直　備前々司時長
能登右近太夫仲時　小山出羽前司長村
和泉前司行方　大藏權少輔朝廣
三河前司頼氏　門波前司朝村
伊賀前司時家　長門守時朝
伊勢前司行經　越中前司頼業
遠江次郎左衛門尉光盛
同六郎左衛門尉時連　桙原右衛門尉景俊
大曽禰左衛門尉長秀　豊後左衛門尉忠時
武藤左衛門尉景頼
出羽次郎左衛門尉行貞
足立三郎左衛門尉元氏　土肥左衛門尉惟時

佐渡五郎左衛門尉基隆
伯耆四郎左衛門尉光清
肥後次郎左衛門尉爲時
信濃四郎左衛門尉行忠
和泉五郎左衛門尉政泰
小野寺四郎左衛門道時
待野五郎左衛門尉爲廣
彌善太右衛門尉康義
肥後三郎左衛門尉景氏　押垂左衛門尉基時
常陸次郎兵衛尉行雄　長内左衛門尉
長三郎左衛門尉朝連
長次郎左衛門尉義連
臺嶽左衛門尉基頼　大泉次郎兵衛尉氏棟
陸奥掃部助實時

十五日　丁卯　鶴岡八幡宮放生會也將軍家依
御惱無御參宮前右馬權頭政村爲奉幣御使
十六日　戊辰　馬場儀如例
十七日　己巳晴　將軍家御惱猶以不快之間御
祈禱事可致懇篤之由被仰諸寺諸社又被奉神馬
於二所三嶋社等畢於鶴岡可被行仁王會事有御
立願云今日當彼岸第七日深澤里奉鑄造金銅八
丈釋迦如來像
廿一日　癸酉晴　奥州前典厩武州秋田城介義
景出羽前司行義以下數輩參御所依御惱御方違

遷之之間御移徙可延引事被經沙汰前大膳亮爲
親御移徙可爲十一月十一日之由進勘文亦十二
月四日十六日吉日也但皆以次日也然而還幸以
後多存例被宥用之條有何事哉之旨申之重有沙
汰十一月十一日爲上吉可被用彼日其間何不被
遣畢哉之由各被定申云秋田城介奉行之
廿二日　甲戌晴　洪印隆辨於御祈禱道場一寢
之間感得靈夢之由相州被言上于御所云小童二
人各著裝束面赤衣青自御所南面唐壇退云將
軍又有御夢想云童二人奉追御所而件兩童闇轉
經之聲忽失去之由云
廿三日　乙亥晴　依御惱事被行四角四境鬼氣
祭晴賢晴茂爲親等朝臣晴秀以平晴尚晴盛茂氏
等奉仕今日御平癒云
廿四日　丙子晴　御惱事溫氣悉散御心神復本
太快然云
廿五日　丁丑晴　爲御祈被奉御劒御馬於二所
三嶋社之上於件三所奉轉讀大般若經又可有御
神樂之由被仰下之武藤左衛門尉景頼爲御使進
發
廿六日　戊寅晴　前備前守從五位下平朝臣時
長卒
廿七日　己卯晴　寅尅被行三萬六千神祭前大
膳亮爲親朝臣奉仕之御使安藝左近藏人御惱御

祈禱也

九月大

一日　壬午晴　將軍家御惱御平愈之後令洗御手足給

二日　癸未天晴　御不豫平愈事被申京都三浦江六郎左衛門尉時連爲御使上洛云々

四日　乙酉晴　千手法信讀太般若經等結願云々

七日　戊子陰　午剋御惱御平減之後有御沐浴之儀而今日沒日也凡無日次之由陰陽道頻雖傾申共一日令洗御手足御之間不可有其憚之間醫家忠茂朝臣計申之若宮別當法印爲加持參候事

拜領義凞國光瀧藥此上可被補僧正云々御教書云々

今度御惱事當祈修中御平愈之條法驗嚴重之由殊所被感思食也仍被進一村尤可有御自愛者也

十六日　丁酉天晴　相州室家俄病惱仍被修祈禱云々

十七日　戊戌晴　將軍家令訪彼不例事御使薩摩七郎左衛門尉爲御使

十八日　己亥天晴　相州室不例平減云々

廿五日　丙午天晴　依先日御立願於鶴岡宮被行王會申刻將軍家御方違入御右武衛泉谷亭

供奉人騎馬

相模右近大夫將監時定

相摸式部大夫時弘　同八郎時隆
大藏少輔朝廣　備後前司康時
大隅前司忠時　伊勢前司行經
城九郎泰盛　彌次郎左衛門尉親盛
隱岐三郎左衛門尉行氏
足立三郎左衛門尉道氏　武藤左衛門尉景賴
小野寺左衛門尉通時
狩野五郎左衛門尉爲廣
歩行
御劔役人
北條六郎時定

城四郎時盛　南部又次郎時實
和泉次郎左衛門尉行章
澁谷左衛門尉武重　武藤次郎兵衛尉頼景
土肥左衛門四郎實經　加藤二郎景經
東中務少輔重

廿九日　庚戌天晴。
被修理亮藤原朝臣長政率。
廿日　辛亥天晴　鎌倉中所々可禁制沽酒之由。
仰保々奉行人等。仍於鎌倉中所々民家。所註之酒
瓮三萬七千二百七十四口。又諸國市酒。全分可
停止之由云。

十月小
三日　甲寅天晴　午刻相州室家。令著姙帶給。加

持鷹巡別當法印云、安東左衛門尉光成、為御使、持
向御帯於彼雪下本坊云云。

八月　己未天晴　將軍家御惱平愈事、可有報賽
于二所三嶋等諸社之由、有其沙汰云云

十四日　乙丑天陰　為休民間愁訴、今日被定條
條、倫長、滿定奉行之。

一　牛馬盗人、乞勾引事、
此犯、及三度者、妻子不可道其科、

一　放火事
准強盗、宜禁遏、

一　殺害并傷事
可召禁其身、至父母妻子親類所從等者、不

懸咎。

一　竊盗事
雖為小過、及兩度者、可准一身之咎、

一　賦物事
可往御式目歟、

一　諍論事
土民之習、雖令如手攫於無疵者、不可處罪科、

一　山賊海賊夜討強盗等事、
任先々之法、條々其沙汰事、

一　密懐他人妻事
名主百姓等中、密懐侘人妻事、訴人出來者、召決
兩方、可尋明證據、名主過料、二十貫文、百姓過料、

五貫文。女罪科事。以同前。

十六日　丁卯天晴　沽酒禁制。殊有其沙汰。悉以被破却畳而一屋一壺被宥之。但可用他事。不可有造酒之儀。若有違犯之輩者。可被處罪科之由。固定下之云云。

十一月大

三日　癸未天晴　去月廿三日。僧事除書到來。法印隆辨補權僧正。三品親王御所賞之由。有尻付云云

四日　甲申天晴　奥州相州布衣。令參政所給評定衆等。不參。三献并御劔御馬如例。是依被新造也。

九日　己丑　於新造御所。被行鎮宅法。鶴岡別當新僧正隆辨奉仕之。

十日　庚寅天晴　新御所御持佛堂被安置御本尊釋迦像。

十一日　辛卯　天顔快霽。申剋。將軍家新御所御移徙也。時刻。寄御車庇於寢殿。相州南面。妻戸間。宰相中將頭方衣被候御簾所。大膳亮爲親朝臣帶持參。時勘文。御覽之後。參入車寄戸内。勤及閉。則給御衣。長井藏人役之。其後出御。御烏帽子直衣供奉人　前駈衣冠

前宮内大輔光度　駿河新大夫俊定

左近大夫將監政茂　長井藏人

能登右近藏人仲時　安藝右近藏人重親

次殿上人　衣冠

花山院中將長雅朝臣　伊勢中將公直朝臣
一條少將能清朝臣　阿野少將公仲朝臣

御車

城四郎時盛　出羽七郎行頼
和泉次郎左衛門尉行章　筑前三郎行實
加藤三郎景經　武藤次郎兵衛尉頼泰
遠江十郎頼連　佐々木孫四郎左衛門尉泰信
澁谷左衛門尉武重　肥後四郎兵衛尉行定
平賀新三郎惟時　鎌田兵衛三郎義長
大泉九郎長氏　大曽禰左衛門太郎長頼
海上彌次郎胤景　土肥左衛門四郎實經
武田七郎政平（已上著直垂帯劍候御車左右）

次御劍役

前右馬權頭

次公卿

土御門宰相中將（顯方卿）

次

尾張前司時章　同次郎公時
掃部助實時　遠江六郎教時
足利太郎家氏　同三郎利氏
陸奥彌四郎時茂　越後五郎時家
遠江太郎清時　上總三郎滿氏
宇都宮下野前司泰經　秋田城介義景
同九郎泰盛　結城前大藏少輔朝廣

前太宰少貳爲佐　安藝前司親光
新田三河前司頼氏　佐々木壹岐前司泰經
越中前司頼業　嶋津大隅前司忠時
後藤壹岐守基政　伊賀前司時家
備後前司康時　伊勢前司行經
武藤左衛門尉景頼　大曽祢左衛門尉長泰
彌次郎左衛門尉親盛　梶原左衛門尉景俊
和泉五郎左衛門尉政泰
大曽祢次郎左衛門尉盛經
隱岐三郎左衛門尉行氏
出羽次郎左衛門尉行有
上野五郎兵衛尉重元　常陸次郎兵衛尉行雄
小里寺四郎左衛門尉道時
得野五郎左衛門尉爲廣
筑前次郎左衛門尉行頼
大須賀次郎左衛門尉徹氏
小田左衛門尉時弘　式部兵衛太郎示政
薩摩七郎左衛門尉祐能　善右衛門尉康長
伯耆左衛門三郎清經　長雅樂左衛門尉
已上布衣下括

到南門外、稅御駕爲親朝臣、參會此所、亦候及閉、自階間下御、爲親給祿役人同前、又被牽黃牛、和泉五郎左衛門尉政泰役之、奥州相州有衣、豫被參候、佐佐木大夫判官氏信布衣、佐々木隱岐判官泰清、

嚮候南門内東西脇。次人々著座庭上。其後將軍家出御。宰相中將被上御簾。小時而相州起座參御前。簀子給。伊勢前司行經立堂下。捧進吉書。相州取之被置御前。御覽之後。返下行經。令退下給。次及黄昏被行評議始。

十二日　壬辰天晴　陰。申一刻。始御馬御覽。薩摩七郎左衛門尉祐能爲奉行。令引立鞠御坪。又被定御簡。於小侍者。未被造畢之間。可著到于御厩侍。著到者。可爲二通。一通者毎夜於常御所。簀子讀申之後。可進置御前。一通者。可献相州御方云。又問見參結番同被定下。掃部助實時主奉行之。

一番　卯酉

梶原右衛門尉　中山左衛門尉

彌次郎左衛門尉

二番　辰戌

城次郎　肥後次郎左衛門尉

信濃四郎左衛門尉　織谷左衛門尉

三番　巳亥

和泉五郎左衛門尉　武田五郎三郎

小山七郎

四番　子午

大曽禰次郎左衛門尉　押垂藏人

遠藤右衛門尉　同五郎左衛門尉

五番　丑未　平盛左衛門尉

後藤壹岐守　薩摩七郎左衛門尉

武部兵衛太郎

六番　寅申

伊賀次郎左衛門尉

武藤七郎

十三日　癸巳天晴　御家人等奉公事毎月勘之。

同就其勤否可有賞罰沙汰之由被仰下云云

十四日　甲午天晴　新御所湯殿始也。相州令出仕給。醫道忠茂朝臣陰陽師為親朝臣也。和泉前司行方為今日奉行

十七日　丁酉天晴　前大膳亮為親奉仕御祈始事。於御靈社前海邊勤行。七瀬祓。伊勢前司行經沙汰雜事。周防修理亮為御使。向其所。

十八日　戊戌　雷鳴一聲。來廿一日。於新造御所依可有御的始。今日被催其射手。陸奥掃部助實時奉行之。

武田五郎七郎　眞板五郎次郎

早河次郎太郎　佐々木左衛門四郎

桑原平内　山城三郎左衛門尉

土肥左衛門四郎　工藤右近三郎

二宮彌次郎　佐貫彌四郎

同七郎　藤澤小四郎

薩摩十郎　平井八郎
布施三郎
右來廿一日可有御弓場始各爲射手可被參勤之
狀依仰所廻如件
廿日　庚子天晴　將軍家新造御所御移徙之後
始入御輿州亭相州豫令候彼所給云
供奉人布衣
前右馬權頭　尾張前司時章
陸奥掃部助實時　相模式部太夫時弘
遠江六郎教時　武藏四郎時仲
遠江太郎清時　足利太郎家氏
同次郎兼氏　秋田城介義景
前太宰少貳爲佐　前太藏權少輔朝貫
三河前司頼氏　大隅前司忠時
安藝前司親光　伊賀前司時家
和泉前司行方　伊勢前司行經
壹岐前司泰經　城次郎頼景
壹岐守基政　梶原左衛門尉景俊
越中前司頼業
備後前司康持
大曽祢左衛門尉長泰
出羽次郎左衛門尉行春
筑前次郎左衛門尉行頼
小野寺四郎左衛門尉道時
大曽祢次郎左衛門尉盛經

豐後左衛門尉忠時　武藤左衛門尉景頼
相馬孫五郎左衛門尉胤村　小田左衛門尉時知
大須賀次郎胤氏　長内左衛門尉
和泉五郎左衛門尉政泰
善右衛門尉康長
長次右衛門尉義連
常陸次郎兵衛門尉行雄
狩野五郎左衛門尉為廣
大泉次郎兵衛尉氏時　武石四郎胤氏
伯耆左衛門三郎清經

廿一日　辛丑於新造御所弓場有御的始。西國司以下、射手十人。各著水干葛袴。淺沓。

分手弓場左右著座。將軍家出御之後。和泉前司行方召射手。一五度射之畢。退出云云

一番
武田五郎七郎源政平
早河次郎太郎藤原祐泰

二番
眞板五郎次郎大中臣經朝
薩摩十郎藤原行廣

三番
平井八郎源清頼　佐貫彌四郎藤原廣信

四番
山城三郎左衛門尉源忠氏

桑原平内平盛時

五番

布施三郎藤原行忠

佐貫七郎藤原廣綱

廿二日　壬寅天晴　御所御持佛堂供養。道師。左大臣法印嚴慧

廿三日　癸卯天晴　貢馬御覽則。尚門濱名稻瀬河邊云云

十二月小

十三日　癸亥天晴　自昨日將軍家御惱。今日戌剋御增氣。仍相州令參給。俄於南門被行土公鬼氣祭。親朝臣奉仕之。尚羽前司行義爲奉行。御使右近藏人仲時

十六日　丙寅天晴　辰剋。日南北西有珥。六尺去之。皆西色。青赤白之由。司天等申之

十七日　丁卯天晴　將軍家御移徙之後。今日始御參鶴岡八幡宮。雖有御惱。餘氣御出。御車御直衣云云

供奉人

先陣隨兵

北條六郎時定　遠江六郎教時

陸奥孫四郎時茂　足利次郎兼氏

遠江太郎清時　三浦介盛時

城九郎泰盛　長井太郎時秀

尾張次郎公時　武藏四郎時仲

城次郎頼景　和泉七郎左衛門尉景經
将野五郎左衛門尉爲廣
足立三郎左衛門尉元氏
式部兵衛次郎光泰　長雅樂左衛門尉
鎌田三郎　海上彌次郎胤景
土肥四郎實經　武田七郎政平
常陸次郎兵衛尉行雄　澁谷左衛門尉武重
肥後四郎兵衛尉行定　鮭延直帯刻
御家人
前右馬權頭布衣
御後布衣
陸奥守　相摸守

尾張前司時章　武藏守朝直
陸奥掃部助實時　相摸右近大夫將監時定
相摸式部大夫時弘　越後五郎時家
足利太郎家氏　佐渡前司基經
小山出羽前司長村　秋田城介義景
三河前司行義　下野前司泰經
前太宰少貳爲佐　和泉前司行方
壹岐前司泰經　後藤壹岐前司基政
伊賀前司時家　伊勢前司行經
大隅前司忠時　遠江次郎左衛門尉光盛
大曽祢左衛門尉長泰
武藤左衛門尉景頼

梶原右衛門尉景俊　上野五郎兵衛尉重光
彌次郎左衛門尉親盛
豐後四郎左衛門尉忠時
出羽次郎左衛門尉行有
大曽祢次郎左衛門尉盛經
小野寺左衛門尉道時
太宰肥後次郎左衛門尉爲時
天野和泉五郎左衛門尉政泰
押垂左衛門尉時基　足立太郎左衛門尉元直
出羽藤次郎左衛門尉頼平
善右衛門尉康長　壹岐次郎左衛門尉茅氏
伯耆二郎清經　式部兵衛太郎光政

後陣隨兵
出羽三郎行資　江戸七郎太郎長元
上野十郎朝村　武石四郎胤氏
阿曽沼小次郎光經　海上次郎胤方
遠江六郎　薩摩八郎祐氏
武田五郎三郎政綱　南部次郎實光

廿七日　丁丑天晴　立春節分御方違事御惱餘氣未令散御之間渡御々所西對北妻云奥州被南盃酒御引出物云々（由）

新刊妻吾鏡卷第四十一

国立公文書館
National Archives of Japan